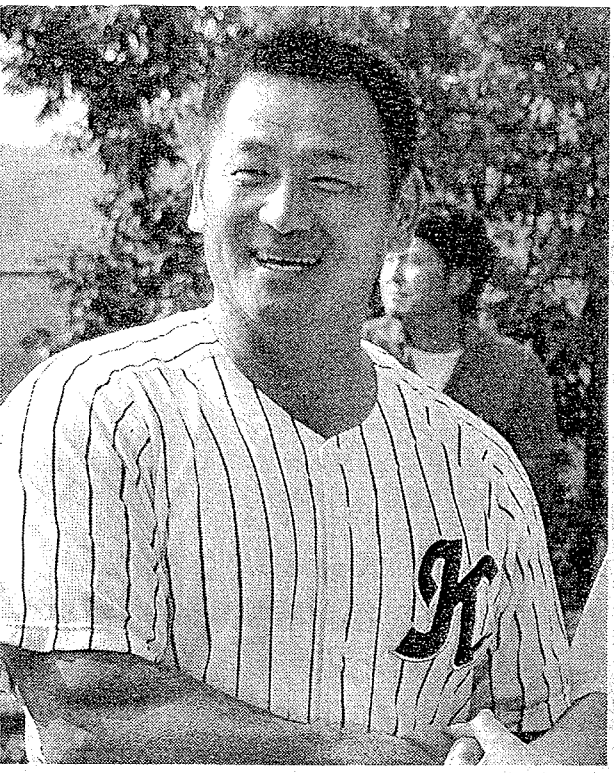
津商で教わった愛と厳しさで戦う

大阪偕星学園　山本哲監督帰郷

甲子園初出場　部員連れ津山に

強豪ひしめく大阪大会を制し、第97回全国高等学校野球選手権大会に、大阪代表として初出場する大阪偕星学園。この野球部を率いるのが、津山商業高校野球部OBの山本哲監督(47)。「甲子園が決まったら俺の故郷に連れていってやる」との教え子たちとの約束を守り、2日帰郷。監督就任から4年目で〝雑草軍団〟を率いて激戦区を戦い抜き、夢の切符を手にした山本監督は、静かな自信がみなぎっていた。



津商の昭和61年度の卒業生。野球部時代、県大会で春・夏合わせて3回ベスト8に。当時の監督の遠藤弥一郎さん(68)＝川崎＝は「4番、センターでガッツのある子だった」と振り返る。

仲間、教え子ら歓迎

津山商高OBで、甲子園初出場を決めた大阪偕星学園の山本哲監督

大阪学院大に進学し、尽誠学園（香川）でのコーチを経て社会人野球の阿部企業（兵庫）、韓国プロ野球の太平洋（現現代）でプレー。米国留学や豪州での勤務後、多摩大聖ヶ丘（東京）でコーチ、平成14～22年まで倉敷高で9年間監督を務めた。そして23年から大阪偕星学園の監督に。

就任早々「甲子園出場」を目標に掲げたが、「大阪では無理」と誰も取り合わなかった。野球部も想像以上に荒れていた。練習はさぼる、頭は金髪、遠征時はバスをサービスエリアでとめると問題を起こすため、休憩をとらない「弾丸遠征」がルールになるほど。

こんなチームを一つにまとめたのは、津商時代に培ったという山本監督の教育ポリシー「愛と猛練習」。「生徒が僕を先生と呼んでくれることに対し、命がけで応えなくてはならい」といい、寮で寝食を共に。ルールを破った選手は、7畳の監督の部屋で一緒に寝ることを義務付ける。「本当の自分の子だと思って接すれば、どんな子どもでも素直になる」。

「練習量は大阪一。普通の学生が東大に行くためには、猛勉強しないといけないのと一緒」。大会直前の練習は一日12時間にもおよび、深夜1、2時になることも珍しくなかった。山本監督は誰よりも早起きして「肉を食べないと大きくならない」と、毎朝子どもたちのために空揚げ弁当を作り続けた。

事実上の決勝戦と言われた準々決勝の大阪桐蔭戦に3－2で競り勝ち、勢いにのると決勝で大体大浪商を4－3で下した。男泣きに泣いた。「いろんな苦労を思い出した。感謝の気持ちでいっぱいになった」。

2日は、大阪偕星学園一行は電光掲示版に同学園を歓迎する文字が浮かび上がる美咲町書副のエイコンスタジアムに午後4時に到着。待ち受けていた津商野球部OB会長の治郎丸真介さん(61)＝勝央町勝間田＝や、副会長の宮地昭範津山市長をはじめ、かつての教え子や後輩、仲間らが次々と集まり激励。選手たちはリラックスした雰囲気で軽く汗を流した。美作高女子ソフトボール部とのソフトボール対決も楽しんだ。

治郎丸さんは「昨年の春に審判として庄司睦君が甲子園に出場しており、OBが出るのは2人目。精いっぱい頑張ってほしい」とエールを送る。

部員には津山出身の1年生が3人いる。「いつだって津山のことは気になっている」。甲子園は6日開幕。「僕はいつも津山代表の気持ちでやってきた。甲子園も、津商で教わった愛と厳しさをもって戦いたい」と抱負を述べた。